

政界の人材不足極まる

〜第2の吉田学校を

政治アナリスト
元杏林大学教授

豊島典雄

吉田茂の人材育成

時事通信社の3月13日の世論調査で、内閣支持率39・3%、不支持率38・8%。不支持理由のトップに「首相を信頼できない」が浮上した。

「万民の上に位する者、己を慎み、品行を正しくし、驕奢を戒め、節儉を行い、職務に精励して人民の標準となり、下民をしてその勤勞を感謝せしむるに至らざれば、政令は行われ難し」（西郷隆盛）。

コロナに、総務省高官等への総理の長男やN・T・Tの高額接待問題などが次々に降りかかり、薄水を踏むような菅内閣の政権運営である。

しかし、ポスト菅にふさわしい人材がない。日本丸を操船する能力のある人材の育成は待ったなしである。

バイデン、習近平、プーチン等と国益を賭けて交渉できる逞しい指導者が欲しい場面である。

そこで、参考にしたのが連合国の

占領下、占領直後に7年余り総理を務め、日本の独立、復興に貢献し、日米安保条約締結により安全保障体制を構築した吉田茂の人材育成策である。

吉田茂は「吉田学校」と言われるように、志ある官僚を政界に誘い、1年生議員でも地位を与え、「親友である、池田と佐藤とを牽制、均衡させ、ライバルとして競わせて、育てあげていく」（戸川猪佐武者・小説吉田学校）。高度成長政策の池田勇人、沖繩返還、日韓国交正常化の佐藤栄作総理等の人材を育成したのである。吉田は戦後政界の富士山である。人材払底の今日、第2の吉田学校が必要である。

人を残すは上

吉田は昭和29年に造船疑獄事件で石を持って追われるかたちで退陣を余儀なくされるが、後に愛弟子の池田勇人、佐藤栄作が相次いで総理になるとその

評価は急上昇する。

「吉田学校の優等生」と言われた池田、佐藤の首相時代となると、吉田の現実政治への影響力は復活した。そのため、大磯詣でも激増した。大磯の

吉田邸には『海千山千楼』の扁額がかかっていた。2階の居室からの眺めがすばらしいせいかと思うと、海千山千の来客が絶えないことだと笑っていたが、晩年の吉田茂は、「財を残すは下、仕事を残すは中、人を残すは上」という言葉を好んで披露した。

「戦後の憲法から日米協調、軽武装・経済主義の吉田路線は、高度成長の中で定着し、同時に彼が育てた人材が保守本流として長くその路線を守った。

昭和42年（1967年）10月20日吉田が89歳で死去したとき、東南アジアを旅行中だった佐藤首相は、急遽帰国してその国葬をとりしきった。さらに翌（1968年）10月の一周忌には、六賢堂に彼を合祀して七賢堂とした

が、吉田は「人を残すは上」の幸せに恵まれたのかもしれない」（岸本弘一著・政界ライバル物語）。

官界から人材

吉田の党人派不信の理由には、「戦前、軍部に屈した」「政策立案能力が不足している」などがある。吉田は昭和24年の第24回衆議院議員総選挙に官僚を大量立候補させ、1年生議員を要職につけて育てた。

昭和21年に吉田茂が自由党を引き継いだ時、連合国最高司令官総司令部（GHQ）による公職追放で、自由党（後に民主自由党→自由党）の人材難は深刻であった。無名の地方政治家の集団となっていた。

「GHQは既成政治家については容赦なく公職追放にして、その大半を政界から遠ざけたが、官僚についてはその対象を戦中の次官までにとどめ、官僚機構を温存して占領統治に活用し



吉田茂が育てた人材が保守本流として長くその路線を守った

た。内務省・警察以外の官僚機構はほとんど無傷だった」（自民党五十年史上巻）。

吉田は人材をその官界に求めた。

「多数の中堅官僚を登場させることによって、政党に新しい血を注入し、政策を遂行する能力をつけた。昭和23年の夏、当時野にあった吉田茂はこれからの政党は政策の判る人がいなければ『発展しない』と考え、優秀な官僚を集めて勉強会を開いていた。池田勇人、佐藤栄作などはこの勉強会に参加したメンバーだったのである。『吉田学校』はこのときに始まったのだし、そこではまじめな政策論議が行われた」（高坂正堯著・宰相吉田茂）。

吉田茂は、官僚の大量入党という手を使った。昭和23年7月21日、民主自由党は元官僚25人の入党を発表した。

これらの元官僚党員は昭和24年1月の衆議院議員総選挙にこぞって立候補し、大部分が当選した。

岡崎勝男（外務次官）、池田勇人（前大蔵次官）、佐藤栄作（前運輸次官）、吉武恵市（労働次官）、坂田英一（農林次官）と事務次官経験者が5人もいた。他に、大橋武夫（建設院次長）、橋本龍伍（経済安定本部課長）、北沢直吉（外務省参事官、秘書官）、福永健司（埼玉県副知事）らがいた。

地位は人をつくる

地位は人をつくるというのが、昭和24年2月の第3次吉田内閣の発足にあたって、池田を大蔵大臣、佐藤を政調会長に起用したのをはじめ、その後の内閣改造でも大橋を法務総裁、橋本を厚生大臣、吉武を労働大臣、佐藤を郵

吉田は、それまでの鳩山系党人派の「借り着」と異なり、政策立案能力を持つこれら官僚派を積極的に活用した。

特に、池田や佐藤は、広川や保利とともに、俗に「吉田の四奉行」と称されるようになった。さらに、前回当選の元内務官僚増田甲子七や、側近の麻生多賀吉、福永健司、坪川信三らも加えて、いわゆる「吉田学校」が形成された」（岸本弘一著・国会議事堂は何を見たか）。「官僚出身者は戦前派の政治家たちが追放によって姿を消した後

の空白を埋めただけでなく、吉田総理は彼らを積極的に内閣と党の要職に抜擢し、保守政界の中核的人材に育てようとした」（自民党五十年史上巻）。

結果は、「こうして大量の官僚が政界に入ったことは、政党の官僚化というマイナスの面もあったけれど、しかし、優秀な人材の登用に役立つことも事実である」（高坂正堯著・宰相吉田茂）。成功したのである。

吉田茂の娘の麻生和子も吉田の官僚登用の理由を著書の『父吉田茂』で「当時、父のそばには佐藤栄作さんと池田勇人さんがいらして、お2人はいつも競り合うようなかたちでおられます

た。このおふたりは、もともと五高時代からのライバルだったと聞いています。佐藤さんは運輸省、池田さんは大蔵省とふたりとも官僚出身でした。

『吉田は、官僚や学者出身者を重く用いすぎる』

と批判され続けましたが、父の理由は単純明快です。敗戦から間もないころ、父から見ると、いわゆる党人の人たちよりも学者さんや官僚出身者のほうが能力があると思われたという、それだけのことでした」と回想している。

後の保守合同で誕生した自由民主党の中で、吉田学校の流れを汲む者は保守本流と言われた。

吉田の保守本流路線の1本は池田から大平正芳、鈴木善幸、宮澤喜一総理等を輩出し、もう1本は佐藤から田中角栄、竹下登、橋本龍太郎、小淵恵三等に引き継がれたが、世代交代毎に人物は小粒化しているようだ。

第2の吉田学校の人材供給源をどこに求めるか？総務省の高額接待問題が象徴するように、今や官界も人材供給源と胸を張りにくい。国造りは人造り。人材育成に各政党には大きな責任がある。

政大臣、岡崎を官房長官や外務大臣に抜擢した。官僚出身者を意識的に重用し、政治家としての育成に努力したのである。「彼らは、吉田体制を固める大きな要因となった。……」